

学会だより

第 93 回 日本胃癌学会総会

國崎 主税

(横浜市立大学附属市民総合医療センター消化器病センター外科)

第 93 回日本胃癌学会総会が大平雅一会長(大阪市立大学 腫瘍外科学講座教授)の主催にて開催されました(2021 年 3 月 3~5 日, 大阪)。今回のテーマは、「胃癌治療の新世界を探る」でした。大阪の代表的な観光スポットである「新世界」を振ったテーマと考えますが、ポスターもその風情を背景に華やかさと医療の深淵さが鮮やかに組み合わせられており、大平先生らしさが滲み出ているものと感じられます。

今回の学会はコロナ禍の影響を受け、残念ながら WEB 開催となりましたが、主題 26 セッション、virtual cancer board 3 セッション、教育講演 5 セッション、一般演題などを含め 700 演題以上の非常に多くの演題が集まり、さらに 1,000 人以上の方が参加して有意義な討議がなされました。

初日のプレナリーセッションでは、恒例の「新しい治療ガイドライン」についての紹介がなされ、多くの先生方が興味をもって聴講されたと聞いております。また、今後の本邦の胃癌治療、日本胃癌学会の行く末を占うともいえる「胃癌認定施設について」、「胃癌登録事業について」の各セッションは、私自身もよく耳を傾けていました。

第 2 日目以降、多くの主題セッションがライブ配信され、皆さん思い思いのセッションを聴講されたと思います。私は食道胃接合部癌の手術術式とくに再建術式に興味があり、聴講しましたが、それぞれ創意工夫に富んだ演題が多く、非常に驚きました。最近の学会で発表されるビデオはクオリティーが高く、本邦における内視鏡外科手技の水準がますます高くなっているものと痛感させられました。また、「胃癌周術期薬物治療の挑戦」では、新規性の高い、興味深い演題が多く、今後日本の大規模臨床試験にも繋がる研究が多かったものと考えます。ロボットの全国的な普及に伴いロボット手術に関

するセッションも多くなり、そのコツやピットフォールが明らかにされてきました。今後ますます、その有用性が確認され、腹腔鏡手術との使い分けが明らかになることを切に願っています。

「進行胃癌に対する薬物治療はこれからどう変わるか?」では、最新の臨床試験や各施設の治療成績が紹介され、今後、免疫チェックポイント阻害剤(ICI)を中心とする薬物治療が展開されることが予想されます。また、現在進行中の臨床試験の結果が明らかにされ、その適応が拡大されるとともに、多くの患者さんの治療に役立つことを期待しています。「胃癌治療におけるゲノム医療の位置づけ」は、基礎医学的な発表が多く、セッション名とは若干異なるようにも思いましたが、これらの基礎データを元に、臨床データが蓄積されていくものと考えます。当施設でも 3 か月間で 60 例を超える症例のゲノム解析コンサルトを受け、30 例を実際に解析しています。うち 8 例に対して、なんらかの治療を推奨することができ、良好な成績と自負しています。この分野は実臨床にますます応用されるかと考えられますので、次回の本学会での実臨床に即した発表を期待しています。

小寺泰弘先生の理事長講演『よりよい「皆様の胃癌学会」とするために』では今後の胃癌学会の将来像を明確に示していただきました。また、大平雅一先生の会長講演「胃癌～研究と治療の新世界を探る」では、施設の基礎・臨床研究の一端を紹介していただき、非常に高い水準の研究ばかりであると改めて認識しました。大平雅一先生、素晴らしい企画をありがとうございました。

来年は私が日本胃癌学会総会を主催させていただきます。これまでの先生方に引けをとらないように頑張りますので、ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。